雨女

八賀茂

鏡に映る女の顔が、いつもよりも少し暗い。それが精神的な表れなのか、単に空を覆う曇天のせいなのかは判別がつかない。ただ、今日は雨だった。

横目に窓の外を見て零しかけたため息を噛み殺して、中身のよく知ったメイクポーチから口紅を握りしめるように取り出す。八つ当たりのような力を緩めて、軽い音を立てて開くキャップの奥から繰り出す甘いピンクを、ゆっくりと唇に滑らせた。小指で下唇の端まで広げて、一度両唇を食み、離す。

かち合った目に嫌気がさして、初夏の季節にしては冷たい鏡に触れた。今すぐにでも手に握った口紅を投げつけてやりたい心地がした。一般に見て可愛い女だ。だからつまらなかった。

結局こちらが視線を逸らして、散らかしたコスメを片付ければ、すぐにでも裾を揺らして鏡の外に出た。もう出なくては、学校に行かなければ。しかし急く思いとは裏腹に時間がある。外に出なくてはならないという義務感だけが急いている。

そんな自覚とともに流行りのカバンを背負って、靴を履いてつま先を鳴らした。比較的新しい傘を持って外に出れば、じっとりとした空気といっぱいの雨の匂いが身を包む。瞼が自然と落ちるように目を閉じて、一秒だったか二秒だったか、そうして雨を感じればようやく歩き出す。アパートの金属製の階段は軽い、安っぽい音が鳴った。

安い音がコンクリートの硬い音へと変わる屋根の終わり、道路の手前に立って傘を差し、空を見上げた。ざあざあ、というよりしとしとと降る雨に、ふと「濡れはしないがなんとはなしに肌の湿る……」と『雨傘』の一節が浮かんだ。濡れはしないが、濡れはしないが、そんな一節を口にして、この雨ではさすがに濡れることだろうと、少し可笑しな気持ちになる。穏やかではあるが霧のような春雨からも遠い。しかも今は初夏、あじさいが見頃の一歩手前だった。しかし、道すがらずっとこの一節が離れなかった。予想通り裾は色濃くなって濡れていた。歩いている間だけ、この作品がどんなだったか思い出そうとしたが、学校に着いたらどうでもよくなった。

外の涼しげな空気とは変わり、講義棟は蒸し暑かった。泥にまみれて汚くなった廊下にキュキュと小さな子どもの靴のような音があちこちから聞こえる。

教室内に入って、一通り見回して唇を噛みしめかける。どこまでも空気がじっとりとしている。外よりも中の方がひどい。ため息をついに零してから窓際の適当な席について、羨むように外を見つめた。

しかし窓に映った反射で結局他の人間を意識せざるを得ない。窓越しに値踏みするような視線を向けていれば

その内女子が二人入ってきた。彼女らのような人間には天候などに左右されないのだろう、しきりに耳につく笑い声を上げていた。方や折れそうなほど細い脚を曝け出し、方や大根のような脚、大根は褒め言葉だと聞いたことがある。では比喩など用いず直接的に太い脚でいいだろう。比べられることを恐れない可愛らしい脚を見せている。それだけでそこにいる女二人がくだらないように感じられた。恥も加減も知らない。

斜め後ろに座った彼女らは二人でいるにも関わらず、スマホを触りながら会話はぽつぽつとしている。そのせいで首の形が間抜けだ。次に彼女たちの近くに友人らしい男子数人が来てようやくその顔を上げた。楽しげに会話して、また耳につく笑い声が聞こえ出したから目を逸らした。運の悪いことに彼らは私の後ろに座って、嫌でも話が入ってくる。やれ昨日はどうしたバイトがああした、私の思い描くような大学生らしい会話で、くだらないと思う。男も女もくだらない。

しかしこんなものは、僻みだ。そう思い返せばこのファンデーションの下は随分汚い。化粧で誤魔化そうとしていても、一滴も当たらない雨で全て剥げてしまっている。せり上がるようなじっとりとした気持ち悪さが、彼女たちの方が正しいのだと私に示している。よく磨かれた爪が腕に食い込んだ。意識がこの窓の外のずっと遠くに行きかけて、雨こそが私の本性だと自覚しかけた頃、そこで先生がやってきて講義が始まった。そうしたら私は汚い僻みなど捨てられたのだから、やはり彼女たちが正しいのだ。

ノートを取りながら、休憩代わりに小さく欠伸をしたら授業中にもかかわらず扉が開いた。男子学生が遅れてきたらしい。遅れているが慌てる様子は見せず、先生も名前を聞いただけでそれ以上文句も何もない。彼はどうやら後ろの集団の一人らしく、見つけるなりお互いに目で笑い合っている。

遅れた彼は集団周りの席を見回して、私の隣くらいしか空いていないことを理解すると、寄ってきて少し屈んで私を覗き込んできた。

「お隣いいですか？」

「どうぞ」

断る理由もなく、二つ返事で答えるとまたノートを取る。隣は楽しそうだが不思議と耳にはつかなかった。目の端で遅刻の彼を捉えて、なんなら微笑ましささえ感じた。

授業を終えて帰る時にもやはり雨が降っていた。行きも帰りも変わらず、強くもなく弱くもなく、雨らしい雨が降りしきる。疲れで重くなった足が時折水たまりを踏みしめて、水が入ってこないか不安になったが、帰りまで足が濡れることはなかった。

階段を登ろうとしたが、屋根のないところから滴り落

ちてきた雫が首にあたって変な声を出す。誰もいないのに気を取り直して登れば、閑静な住宅街を雨が覆うのを見下ろせた。

今この間彼女たちも、私の嫌いな女も、名前も知らない遅刻の彼も、どこかで天候など気にも留めずに楽しく笑って、そして夜を過ごしたりするのだろうか。また汚いものがせり上がってくる心地がする。

私は傘を高く持ちあげて、三階の通路からその水滴を払うように何度か小さく開いて閉じてと落としてやった。そうして通路の壁に手を置いて、真下の駐輪場を見てみてが、変わらず雨を受ける屋根があるだけだった。私が降らせた雨がこの屋根のどこかにあるのだ。

女はなんだかいい気になって、家に入るまでの残り数歩の足取りが妙に軽かった。朝からあった心の重さも何もない。ドアを開けて最後に横目に景色を見れば、嘲るようにこの言葉が浮かんだのである。

「あら、外は雨なのね」